多々田透汰の生存戦略

DACCAN

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代女が明治少年こと多々田透汰に憑依して頑張って生きる話。

特別賢くなければ、専門知識もない。運と根性で生きていく。

※表現を柔らかくしてｒ１８タグ外しました。問題があればご報告いただけると有難いです。

目次

幼年期
01プロローグ ―― 1
02キセイ先 ―― 6
03イカれる男 ―― 17
軍生活
04ウツ鬱たる日々 ―― 29
05私のヨビゴエ ―― 38

幼年期
01プロローグ

この夢が夢では無いと理解するまでに、約三日。
現実を受け入れられなくて、寝込んでから一週間。
そろそろ受け入れ始めてから二日。
それでも心が拒絶反応を起こしてから五日。
そして、現在。約17日を経てようやく覚悟を決め、私は”俺”として生きる事を（嫌々ながら）ようやく受け入れた。
時は明治23年。場所は開拓のあまり進んでいないどこかの山の集落。私の俺としての名は多々田透汰（ただたとうた）。た行が多すぎて発音がしにくい。齢は9の育ち盛りであるらしい。はあ、泣きたい。現実逃避期間に散々泣き散らしたせいで涙は既に枯れているが。
私は自分に何が起こってしまったかを理解している。それは私がまだ”私”であったとき、所謂オタクと呼ばれる人間であったからだ。異世界転生モノ、ええ、流行っていましたね。なかなか好きなジャンルではあった。もちろん物語の世界として楽しむ

分にはの話ではある。

まさか自分がこうして過去の誰かにブチ込まれるなんて夢にも思わなかったし、実際自分が体験するのはノーサンキュー。この状況、唯一幸いであったのは言葉が通じるという部分だけでは無いだろうか。あとは最悪だ。

多々田透汰になる前の話をしよう。平和な世の中に私はいた。中学の頃からオタクをこじらせ、高校卒業と共に同人の世界に腰まで浸かり大学は一年で辞めクソニートをしながら同人活動を続ける毎日を送っていた。おかげで人よりもイラストが上手くなり有難いことにも商業から声がかかり、現在は細々と絵で金を稼ぎながら暮らすまあどこにでもいるかもしれないただの女であった。

そんなインドア極まれりな人間が、たまたまどハマりした漫画の聖地巡礼をしようとしたのが間違いだったのだろうか。それともペーパーゴールド免許の癖に交通費ケチって親の車で遠出したのが間違いだったのか。信号無視の暴走スポーツカーによりにもよって右から突っ込まれたせいで痛みを感じる間も無く昇天したのだから、まあどちらにせよ私は悪くない筈だ。青信号を確認してから発信。いくらペーパーでもそれくらいはできていただろう。今となってはどうでもいいことである。

衝撃と共に意識が暗転した後は、まるで朝を迎えるような、夢から覚めるような感覚で起床。悪夢が始まり17日目の今日を迎えるまでに至る。平和な世で絵描きをして

いたあの日々がむしろ微睡みの世界でみていた夢だったのかと思う日もあるが、私はあの日々が嘘であったとは考えたくない。とは言え、今がまだ眠った世界にあるとは到底思えないため、私はあの日死に、なんらかの理由で魂が過去に戻ってしまったとの結論を出した。たったの17日でその結論を受け入れたのは、早いのか遅いのか。ただ創作物の中では受け入れるのが早ければ早いほど生存率は上がる気がするので、遣る瀬無い気持ちを抱えながらも今日この日を、多々田透汰という少年の身体をもって迎えることを受け入れたのである。はあ、憂鬱な気持ちだ。

多々田透汰はきっと愛されていた。〝母〟が言うには『天真爛漫で、優しく、でも少しだけ喧嘩っ早くて腕のある』少年だったようだ。笑顔が可愛いらしい。親の欲目かもしれないが。

そんな多々田透汰少年の中に草臥れた女の意識が入ったらどうだろう。しかも17日間も錯乱して意味の分からない言葉や質問を繰り返してきたら。恐怖体験である。私の子供はいないがもしいたと仮定して、自分の可愛い息子が発狂し、落ち着いたと思ったらなんだか性格が変わっていた…そんなことになれば怖すぎて距離を置いてしまうかもしれない。そう言うことだ。

20日目。私こと多々田透汰少年は捨てられてしまった。

いや母君よ思ったよりも思い切った決断をなさる。まさか眠っている間に捨てられ

るとは思わなんだ。

「…どうしよ」

この一言に限る。流石に身一つで捨てるのは良心が痛んだのか、少しの食料と竹筒に入れられた水に小刀の入った風呂敷が申し訳なさそうに置いてあった。手紙も無いのか。さよならの一言も貰えないとは。

一度若くして死んでいる身としては今生ではしぶとく皺くちゃのジジイになるまで生きて寿命尽きるまで人生楽しんでやろうと思っていたが、そんな計画はこの時点で破綻した。まずは生きて森を抜けなければ。

ただ捨てられた身としては、また違う集落に出たいものである。戻ってきたとなれば今度は直接的に殺されかねないものでね。

取り敢えず腹がぐうと存在を主張し始めたため風呂敷の中身を取り出し齧る。小麦粉を練って焼いただけのパサパサの餅のようなものだったため美味い不味い以前の問題だったが、これは喉の水分を多分に持っていくため貴重な水も消費することになった。

育ち盛りの子供にはまだまだ足りない量ではあるが、本当に気持ち程度の食料しか頂けなかったため我慢をして残りを風呂敷に包み直す。はあ、腹一杯のフライドポテトが食べたい。ジャンキーな現代病に侵された元干物女はそんなことを考える。

行ったこともない富士の樹海を思わせる深い森の中、ひたすら歩みを進める。目的地はどこか人間の営みが行われる場所。今求めるは水場。サバイバルのサの字も知らないが、人間ひとまず生きていくためには水の確保が一番だと言うことは心得ている。それに川を辿っていけばいずれは集落などに辿り着けるものだろう。そう信じている。

必死に平常心を装いながら足を動かすことしかできない。心ばかりの護身のために握った小刀を無駄に力を入れて握ってしまうのは恐怖からきているものだとは理解していた。

天辺にいたはずの太陽が少しずつ傾いてきたことに気付いたのは、大きめの木の根っこに足を取られて尻餅をついた時だった。このまま黄昏時を迎え、夜が来る。人の手の入っていない山にはどんな生き物がいるのだろう。明治にはまだ狼はいるのだろうか、猪は流石に出そうだ、きっと熊もいる、なんなら今の自分は鹿にも負けるしリスにも勝てない。この森の中で一番弱いのは自分だ。そんな弱い生き物が無事に次の日の朝日を拝めるのだろうか。そう考えると眠る事が怖かった。

しかし9歳の子供の身体は素直だ。抱えた疲労を回復するためにとろりとろりと瞼を落とす。

せめて、と小刀を今一度懐に抱え直し、鉛のように重い身体を丸めて深い息を吐いた。そうすれば、もう何も聞こえなくなった。

０２キセイ先

意外としぶとく生き残っているな、とは客観的に見てみた自分の感想である。まあ他に人間的思考回路を持つ生物と出会っていないから自ずと自分との会話が多くなるのは仕方がないが。

この森に捨てられてから早数日が経った。日数を数えるために樹皮に残していた”正”の字は、その場に留まらない自分には意味の無いものと気付いてから残すのをやめた。どんなに日数を重ねても一の字から進まないのである。当たり前だがそのことに気付くまで三日かかった。元成人済みなのだが、頭の回転の速さは現在の肉体に引きずられるのだろうか…。いや、空腹が故に起きたことだと思いたい。きっとそう。

自分は運がいいのかもしれない。竹筒の中の水が無くなる前に川を見つける事ができた。そして食料も確保できている。もちろん野草の知識など無いが、どこかでみたことあるような無いような…とうっすら記憶に引っかかる形をしている草を覚悟を決め食べてみたところ、どうやら腹を下さないことから食用可能の草と判明。それを５回ほど繰り返し、今ではその５つの草を日毎にローテーションで食べている。美味い不味いは気にしない約束だ。ああ、母の最後の情けから残されていた練った小麦粉はもちろん

既に腹の中、いや糞としてどこかに落としてきた。残った母の形見（死んだわけではないが）はもはや小刀しかない。なんとなく寂しいので小刀にはカアサンと名付けたのはなかなか子供らしくて9歳に擬態できているのではないだろうか。

話が逸れた。

運がいいと感じることはまだある。そう、例えば今。

「まさか本当に川を辿ると集落があるなんて…」

両手で双眼鏡の様に丸を作り覗き込めば、わざわざ狭まった視界の中に人の営みを確認できた。藁をふんだんに使った木造の家々が立ち並び、深く色の変わった四角形の地は畑だろうか。人と思しき影がなにやら作業をしていた。『おいでよ！〇〇県』と書かれた観光ポスターの写真として使われていそうな田舎の長閑な風景に映えそうな光景である。

久方ぶりに恐怖以外で高鳴る心臓を薄汚れた服の上から抑えつけ、じっくりと深呼吸をする。ここで馬鹿正直に駆け寄る様なことはしない。なぜならここが多々田透汰の故郷である可能性は0ではないからだ。自分がどの方向からやってきてどの方向に進んだのかはまったくもって皆目見当がつかない状態であるため、もしかするともしかするかもしれない。まあ、いくら子供の足とはいえど数日歩いた距離にある此処が、大人の足で一晩で着く場所にあるとは思えないが万が一がある。

そろりそろりと遠去かり、見慣れた川縁の大きめな石の上で息を吐いた。
さて、どうしよう。
もちろん本音としては青狸に泣きつく某少年の様に涙を濁流の様に流しながら助けを乞いたいところだが、不安要素がありすぎる。
とはいえ、草と水でしのいできたこの腹の虫の渇望の声も来るところまで来てしまっている。悲鳴を超えて慟哭の様に訴えてくるため無視するにもあと何日できるだろうか。正直、限界だ。
冷たい川の水で空腹を紛らしながら回らない頭を必死に回転させる。
「ふう…」
手に付着する水滴をピッピッと払い、残った水分を服で拭く。冷静に見下ろせばなかなかにひどい格好で酷く憂鬱になる。潔癖なほど清潔な現代の人間では耐え難い格好だ。ふと湧いてきた好奇心で鼻を脇に寄せて嗅いでみれば、宇宙が背後に広がった気がした。有り体に言えばとてつもなく臭い。昔社会科見学で訪れた牧場の香りが最高級のフレグランスに思えるほどに臭かった。人間の纏っていい臭気を超えていると思った。
臭いに殴られた頭は栄養不足と相まって不明瞭になっていく。ええい、なにも思いつかんぞ。どうすればあの集落が多々田透汰と関係ない場所だと証明できるのか。もし

そうだとしても早めに結論を出さなければ、違う集落を求める前に行き倒れてしまう。一人一人顔を確認するか？何人いるかもわからないが、それしか思いつかないほど限界が近かった。

ともあれ、今日の活動限界が来たようだ。まだ日も高くあるが、もうこれ以上動けません。寝ることにしよう。

よっこらしょ、と歳に見合わない掛け声とともに怠い身体を起こす。なるべく野生の動物に襲われないように身を隠して眠るのはこの残念サバイバル生活で既に心得ていのだ。

ずりずりと意識だけに引き摺られるように樹木に手をつきながら移動していると、不意に右脇腹に軽い衝撃が走った。

トスッ。字に起こすならそんな感じ。

「…あぇ？」

同時に山に木霊する引き攣れた鳥の悲鳴、少し遅れて耳に届く聞き覚えのない音。

なんだろう。ちょうど衝撃のあったところは先程右手についた水を拭った辺りだが、何故か必要以上に湿り気を帯びている気がする。

「？　…、？」

汚れて黒っぽくなった服が妙な色をしている。というか、変な穴が空いている。ポッ

カリと、小さな9歳の親指なら通りそうなほどの小さな穴だ。
聞いたことも無いような甲高い悲鳴が耳を突いた。その悲鳴を上げているのは自分の喉だということに気づいた時に、漸く身を裂く激痛を覚えた。
え？　これってもしかして撃たれた？　それで痛い感じ？　うわぁ。
自分とは別の誰かがまるで第三者視点で眺めているような、そんな不思議な体験をしながら意識を失った。

暑い、熱い、あつい。
身体を掻き毟りたくなるほどの熱に、手を行き場なく彷徨わせる。その熱は自分の腹から広がっていることに気付き、そこに手を這わせようとするが何かに阻まれた。
なぜ、なぜ。あつい。
『ダメだ。がまんしろ』
なぜ、どうして、つらい。
『ダメだ。今はまだ、だめ』
グッと口に冷たい何かが押し込まれ、その冷気を求めるように必死に喉を動かした。

それでもまだ熱は引かず、もどかしさに唸り声を上げる。
目尻から水が流れていく。身体中から水分が失われて逝く。
自分が空っぽになってしまうようだ。自分の存在を証明するのは、忌々しい熱だけだ。
死ぬのだろうか。消えるのだろうか。嫌だ。こんな終わりは迎えたくない。
『終わらせないから、今は安心して眠れ』
ここに留めるようにギュッと右手を拘束される。
それに縋り付くように握り返し、私は、私はーーー……、、

「はっ」
びくり、と雷に撃たれたような衝撃と共に身体を起こす。
「ンヒィィィ…」
と、共に全身を駆け抜ける激痛に身体を倒す。
額に気持ち悪い脂汗を滲ませながら痛みを誤魔化すように深呼吸を数回し、ぎゅっと瞑った瞼をゆっくり開く。急に行動を起こせばまた誤魔化した波が襲ってくるのは理

解できたためだ。多々田透汰は知らんが自分は馬鹿ではない。痛みはなるべく避けたいのが人間のサガだ。

膨らんだ鼻から新鮮な空気を出し入れしながら眼球だけ左右させて辺りを見渡す。どうやらここは家屋の中のようだ。久々に人工物の中に居るためか少々変な気分になる。

「起きたか」

「！」

眼球の可動範囲外から声をかけられ心臓が跳ねる。しかし極めて冷静に、そしてゆっくりと首を声のかけられた上方向に伸ばし視線を向けると、そこには不思議な雰囲気を持つ少年が立っていた。

「き、ン〝…ごほっごほ、ンづァッ！」

「…むりに話さなくていい。キズがいたむ」

「ぅ…ン」

久々に喉を使ったせいか噎せた。その振動が腹の傷にダイレクトに響いて痛む。痛みのピタゴラスイッチが起きた。

少年は御猪口のような小さい器に入った水をわざわざ口に静かに流し込んでくれた。噎せないように気をつけながら嚥下し、一息つく。その姿を確認してか、少年は濡れて

冷たい布で滲んだ汗を拭ってくれた。
「はあ…あり、がとう」
「落ちついたか」
「うん」
「そう」
無理はせず、発音に困らない範囲で言葉を紡ぐ。
自分の身体では無いくらい、口を開くだけで疲れる。四肢に漬物石でも乗せられているかのように重さを感じながら、緩やかに手を挙げた。爪が伸び、間に土が挟まってるせいか黒ずんでいる汚い自分の手が見える。二、三度握って開いてを繰り返し、また降ろした。
はあ、生きている。
「すまない。鳥をうった流れ弾にあたったんだ」
「…？」
「はらのキズ。おれのせい」
少年はすまないと言う割には酷く無表情で、こちらの右脇腹を指差した。ああこれ、流れ弾だったの。まさか狙われて撃たれた訳ではなくて逆に安心した。
「痛いけど、まあ、運が悪かったなぁ…」

「あの時間、山にいる人は少ないんだ。まさかしゃせんに人がいるとは思わなかった」
「ああ、そう」
確認はしていないが治療されているであろう傷を上から軽く撫でる。不思議と怒りは湧かなかった。寧ろ本心はラッキーとか思っている自分がいる。どちらにせよあのままでは死んでいたし。保護されるきっかけができたので、まあかなり命がけではあったが…やはり運がいいのだろう。
そんな下心を隠して、気にすんなの意を込め少年に緩く微笑むと驚いたように大きな目を更にクリクリに見開いた。眼球落ちるぞ。
そのまま沈黙が流れ、時間も流れる。初対面の気まずさは多少あれど、どちらにせよ今は身体がしんどいため沈黙を続けるしかない。
しばらくすると、少年は突然スイッチが入ったように動き出した。
「ど、こに」
「かあさんを、よんでくる。目がさめたって」
「ああ…」
そうか、親はいるよな。なんとなく微妙な気持ちになりながらヒラリと手を振った。
残念ながら少年は一瞥しただけで振り返してはくれなかったが、まあいいだろう。そして再び訪れた静寂の中、体力に限界がきたのか再び眠ってしまった。

次に目を覚ましたのは嗅ぎ慣れたようなそうでないような香りが鼻をかすめてからだった。ゆるゆると瞼を開けばすっかり夜の帳が下り、人工的な暖色灯に包まれた室内が視界に入ってくる。自分が寝ていたことを瞬時に把握し、少年が母親を呼んでくると言ったのに待てなかった自分を少しだけ恥じた。

前回目を覚ました時よりもいくらか軽くなった身体を起こすために腕に力を入れると、不意に横から補助が入る。

「無理はしないで」

美しい顔をした女性だった。驚いて力が抜けるが、身体はそのまま支えられていた。女性の背後にこちらを伺う先程の少年がいたため、この人が母親ということは理解した。なるほど、少し雰囲気が似てないことも…ないかも。

「ありがとう、ございます」

「いいの。ご飯は食べられる?」

「え、と…たぶん」

たぶんと言いながら空気を読まない腹の怪物がこれでもかと喚いたため、母親は少し呆気に取られた表情をした後上品に笑った。ええいこの野郎、誰の断りなく鳴いてやがるんだ。かなり恥ずかしくなった。

キビなどが混ざる粥を食べさせてもらいながらこの村について聞く。多々田の名を持つ家族はこの集落にはいないことから、此処は元いた所とはまた違う村ということが判明した。安心したせいか涙腺も緩んだ。御涙頂戴ではないが、その涙を利用して自分の境遇を語る。

「そう…捨てられてしまったのね…」

「もう、俺には、帰る場所はありません。

なんでもします。どうか俺をこの家に置いていただけませんか?」

「そうねぇ…百之助。貴方はいい?」

「おれは…なんでも…」

視線を合わせずにそう言った少年…百之助は無関係だと言わんばかりに箸を進めた。それを見て困ったようにため息をついた母親は、未だに流れる俺の頬の涙をそっと拭い、安心させるように笑ってくれた。

この日から私…いや俺、多々田透汰は、尾形家に居候することになったのだ。

０３イカれる男

撃たれた傷もすっかり癒えた。

残念ながらと言うべきか、腹から突き抜けた背中にかけての銃創はハッキリと残ってしまったが、まあ男の勲章と表現すれば格好いいのでそうすることにした。間抜けにも狩人の射線に入って撃たれただけの物語もない傷ではあるが。

尾形家に居候してから一年が過ぎている。俺こと多々田透汰も１０歳となり、偶然同い年であった百之助少年も同じく歳を重ねた。今のところ俺の方が身長は高いため兄貴ヅラしているが、百之助少年は残念ながらそう思っていないようだ。まあ詳しい多々田透汰の誕生日は永遠の謎となったため俺が兄貴と言えばそうなるので、百之助は弟と思っておこうと決めている。

「百之助」

「…なに、透汰」

「また今日もあんこう鍋らしいけど、どうする？」

「……」

山から銃と鳥を担いで降りてきた百之助少年を見つけ声をかける。つい先ほどまで

尾形母の手伝い（針仕事）をしていた俺は献立を聞かされていたため、その手に掴まれた鳥が無駄になることを知っていた。

寒さも厳しくなりつつあり、冬も本場に向かう今日この頃。いくらアンコウが獲れる時期とはいえこうも頻繁にあんこう鍋になるのはなかなか飽きがくるものだ。いや、美味しいが…やっぱり飽きが…。

「…適当に交換してくる」

「ああ、じゃあ俺やってくるよ。山寒かったろ？　火鉢出してあるから」

「そう」

あんこう鍋と聞いて雰囲気が落ち込んでいたようだが、火鉢と聞くや否やこちらにくたばった鳥を押し付けて気持ち速歩で家に向かう百之助の背中を見届けてため息を吐く。素直なのかそうで無いのか…まるで気まぐれな猫のような掴み所のない百之助である。

手に持った鳥を眺めると、綺麗に頭を撃ち抜かれていることが確認できる。相も変わらず素晴らしい射撃能力だ。１０歳でだぞ。たったの１０年…いや、まさか生まれた時から銃を扱えた筈がないのでたったの数年でこんなに素晴らしい腕になるなんて、未来ならクレー射撃のオリンピック選手になれただろうに…時代が早過ぎたな。こんな山中のど田舎で腐らせておくには勿体なさすぎる才能を嘆きつつ、村の裕福な層の家の門

扉を叩く。此処の家は肉を米と交換してくれるのだ。この家の肥えた肉好きな息子に感謝しつつ、多くはない米を入れた麻袋を握りしめて帰路に着いた。

最近、家の中は静かだ。いや元々無口な百之助がいるので騒がしい訳ではないのだが、俺がここでお世話になり始めた頃はもう少し生きた空気が流れていた気がする。

なんというか、こう、重いのだ。空気が死んでいる。それもこれも、どうしたのか気が少しずつ可笑しくなっている尾形母の所為なのだろう。ナニがとはっきりした原因はないが…どんどんと厚くなる透明な壁を感じるのだ。

「百之助、帰った」

「おかえり」

「火鉢は暖かいか？」

「…まあ、火鉢だから」

「そりゃそうだ」

今日も家の中で小さく丸まる百之助の背中を見つける。その横に腰を落ち着け、冷えた身体に温もりを分けてもらうように抱き寄せる。あったかい。

少し身動ぎをしたものの直ぐに大人しくなり腕の中で更に丸くなる。最初は全力で嫌がられた記憶があるが、断固として離さない構えをとっているうちに諦めがついたのかいつからか暴れなくなっていった。よしよし。

小さい背中が寂しそうで悲しくなるから抱き寄せるなんて口に出して言ったら撃たれそうだ。
「なー百之助」
「なに」
「…俺にも銃の撃ち方教えてくれよ」
「……なんで」
「なんでって…まあ、そりゃできた方が色々と便利だろ。生きてく上で」
「透汰は、刃物があるだろ」
「カアサンで獲物仕留めるの結構難しいんだぞ？　離れたところからパーンってできた方が強いじゃん」
「……」
カアサンとは、もちろん手切れ金替わりのあの小刀の事である。今思えば刃物にカアサンと名付けるのはなかなかなサイコパスみのある発想ではあるが、馴染んでしまったのでそのままのネームだ。マミーとかにすれば良かったな。
そして密かに猟銃のことをトオサンと呼んでることは自分の中だけの秘密である。バレたら怖い。
「じゃあ、もっと暖かくなって獲物が増えたら教えてくれよ。冬よりは打ち損じなさそ

うじゃん」
「…仕方がないな」
「よーしよし！　さすが我が弟！　懐の広い男だぜ！」
「弟ではない」
頑固なやつだ。

木の扉の隙間から覗く朝日が眩しい。寝相でひっくり返った位置が悪かったのか、漏れた光が閉じた瞳の位置に直撃したことにより夢の世界から覚醒した。
大きな伸びをしながら布団から出ると、既に隣に居た百之助は起きて出て行った後だった。しまった、寝坊した。
冬の間は朝にやるべきことも多くはないのだが、それでも仕事はある。この機械のない時代、人の手ですべきことは多いのだ。
急いで布団を片し、着替え、甕から水を汲み顔を洗う。冬の刺すような冷たい水で１２０％目が覚めた。
「お母さんごめん、寝坊した！」

「ああ、おはよう透汰さん。随分と気持ち良さそうだったから起こさなかったのよ」
「うわあ本当ごめんなさい」
今朝の尾形母は平常の彼女だ。優しげに目元を細める尾形母に平謝りし、保存食の漬物に手を加える。何故か俺の漬ける物は美味いと評判である。それが終わったら昨日の夜のうちに積もっていたらしい雪を退ける作業が待っている。子供の身体にはちと重労働だが、男手がいないためやらねばならないのだ。
外に出れば既に百之助が雪下ろしをしていた。俺の顔を見つけると心なしかジト目でこちらを見てくるので俺は更に苦笑いを零した。ごめんて。
昼が近付き、漸く雪下ろしが終わる。真っ白な雪からの照り返しで顔が幾らか焼けたのかピリピリするが、一過性のものだろう。多々田透汰は色白で黒くなりにくいのだ。百之助も同じく顔がやや火照ったように赤くなっていたが、彼も色白なので多少赤くなる程度だろう。黒く焼ければその不健康そうな表情も些かマシになるであろうに、実に残念である。
まともな尾形母とあんこう鍋ではない昼食を済ませ、百之助は少し遅くなったが銃を担ぎ山へと入って行った。俺もカアサンを腰に括り薪を探しに出る。もちろん流れ弾に当たらぬよう方向はやや変えて、だ。同じ過ちは二度繰り返さない男、多々田透汰に清き一票を。

「今日はこんなもんかな」
乾いた枝を適当な蔓でまとめ、山を降りる。なかなかいい時間になっていたので、百之助もとっくに家に帰っていることだろう。腕のいい弟は今日も獲物を仕留めるだろうから、あとは尾形母が可笑しくなっていないことを祈るだけだ。
山を降りると、村が何故か騒ついていた。
「？　…なにがあったんだ？」
「ああ！　透汰さん！　無事だったのね！」
「お母さん」
薪を抱えた俺を見つけた尾形母が駆け寄ってくる。震える彼女の手を握りながら落ち着かせながら聴くところによると、数日前に行方不明になった村の女の子が川で発見されたらしい。しかも確実に人為的に汚されて、だ。それはどうやら山賊の仕業であろうと。その話に冷や汗がドッと身体中から滲んだ。
「確かに、子供だけで山に入るのはしばらく止した方がいいかもだ」
「うん。透汰さんも、百之助も一人で行ってしまうから…お隣の川崎さんが代わりに薪集めをしてくれると言うから、甘えましょう」

「そうだね。…ところでお母さん、百之助は？」
「一緒ではないの？」
「百之助は狩りに…」
寒さではない、全身から血の気が引いて血液が凍るような感覚に陥った。途端に尾形母の手を離し、薪を投げ捨てて山へと走る。
百之助がどこに向かったか知っているのは俺だけだった。
後ろから飛んでくる制止の声は、俺の耳には入らなかった。

はあ、はあ、はあ。
息が乱れるほど走っているのに、息が止まっているみたいだ。嫌な予感に全身を雁字搦めにされ、上手く呼吸ができない。
まさか山賊に会っていないだろうという楽観的な思考と、こんな時間に帰ってこないなんて恐らく、という現実的な思考がぐちゃぐちゃになって焦りを加速させる。
いつだか二人で山に入った時に見つけた山小屋が怪しいと狙いをつけてひたすらにがむしゃらに脚を動かすしかできない。
百之助、百之助、百之助。
あいつは銃を携えているし、最悪のことにはならないだろう。ああでも彼はたったの

１０歳の少年だ。普段誰よりも冷静でいるとしても、大人に敵うかなんて。考えるまでもない。『チカコちゃんが山賊に…』うるさいうるさい！ヒャクノスケは無事なんだ！チカコちゃんではない！きっと今日はたまたま獲物が上手く捕れずに手こずっているだけ、そうに違いない、そんなわけないだろ、いやそうあってほしい。

頼む、頼むから百之助。無事でいてくれ。

ああ、ああ。頼むから…。

黄昏の夕日に照らされる、ポツリと立つ山小屋。

生き物は全て死んだかのように冷えた空気の中、俺は息を殺して近付いた。

隙間から見える小屋の中にはみっつのひとかげ。

ふたつはしらないおとな。ひとつは…

『チカコちゃんが山賊にケガサレて川に棄てられてたのよ!!!!』

――ああ……。なるほどな。

ころす。

コロス殺す殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺――――――

―――

…、た。透汰」

「コロス、殺す、殺す殺す、コロス」
「透汰、透汰兄さん…もう、もう死んでるよ…ねえ、ねえ、おれをみて」
酷くか弱い手に頬を叩かれ、意識が引き上げられる。真っ黒な闇に光が滲むような感覚だった。
目の焦点が合って、ようやく自分に縋り付く小さな男の子を視界に認める。それは探していた弟の姿だった。
「百之助、大丈夫？」
「うん、だいじょうぶだよ」
酷い姿だった。なんて可哀想に、百之助。この服はもう捨てなければならない。自分も、酷い姿だけれども。
「ごめん、遅くなって」
「大丈夫…大丈夫だからもう帰ろう」
「俺がもっと早く気付けてれば」
「いいんだよ。助けてくれたじゃないか」
「本当に本当にごめんね百之助、ごめんなさい」
それ以上百之助は何も言わず、涙も流さず。ただ静かに震えて抱き着くだけであった。

俺はただの肉になった二つの塊を見下ろし、私の最期はこんな風にぐちゃぐちゃになったんだろうなと考えていた。

劈く様な冷えた川の水で禊をした。冷水故にあまり長くは入れなかったが、できる限り百之助の汚れた部分を拭い、清める。糞野郎どもの歪んだ性癖なのかどうかはよく分からないが、最悪の最悪は未遂だったらしい。しかし後一歩遅ければと思うと…殺意でまた頭がどうにかなりそうだ。

自分も川に浸かって赤色やら何かの破片やらを落としていく。早く上がらなくては百之助が風邪を引いてしまうだろうから急ごう。

「あ…そうだ、カアサンも綺麗にしないとな。ごめんな、こんなに手荒に使って…」

ドロドロになった小刀も気持ち悪かったので水に浸けて綺麗にした。こんな扱いをするのもどうかと思ったのであとでしっかりと手入れしなければなぁ。

百之助は何も言わずに、俺の禊が終わるのを見つめていた。

次の日、俺と百之助はしっかりと熱を出した。

軍生活
０４ウツ鬱たる日々

尾形母が死んだので、里子に出されることになった。

百之助は祖母とそのまま暮らすことになったのだが、『流石に育ち盛り二人は面倒見きれんわ』とのことで上記の通りに。そりゃそうだ。むしろよく尾形母は文句一つ言わずに俺を受け入れてくれたものだ。

まあ、晩年は可笑しいまま帰ってこれず、多々田透汰という少年の存在を認めていたかはわからないけども。

彼女の死は突然だった。俺が山で狩った猪の皮を、わざわざ祖母と下山して町に売りに出ていた間に起こった出来事だ。どうやら殺鼠剤を鍋に入れ自殺を図ったそうだ。色々と疑問は残るが、その場にいた百之助がそういうのであればそうなのだろう。何の因果か、百之助誘拐事件から丁度二年が過ぎた日の出来事だった。なんだろう、この日は呪われているのかな。

１２歳の多々田透汰少年が貰われて行った先は、尾形家よりかはいくらか裕福そうな、これまた不思議な縁ではあるが多々田家という処であった。いやはや、なんともな

んとも。俺に言いつけられたことは一つ。次男の代わりに軍へ行くこと。いわゆる影武者というものに抜擢されたらしい。ほぉう。

どうやらこの家には俺の三つ上の長男、そして同い年の次男、更に二つ下に長女がいるそうだ。明治の現在、国には徴兵令というものが定めてあるらしく、一家の跡継ぎとか健康に問題のある男子以外はお務めに出なければならないそうだ。へぇ大変だ。長男はさて置き、幸か不幸か次男は今現在まで健康そのものである。多少気は弱いが、まあこのままいけば無事に満２０歳を迎え、国の為に行って参ります！うおおお、ボカーーーンの対象になりかねない、とのことで。そんなのは嫌じゃ嫌じゃのムスコンな親父殿は育ててやるから次男の代わりになれよ、とのことで俺を貰ったそうだ。男が語った変に情緒たっぷりのクッソ長い話しは途中聞き流していたが大体の流れは合っている筈だ。替え玉とか認められるのかは分からないが、まあやれと言われたらやるしかない。俺には選択できるカードが無いのだから。

秘匿されている。

俺の存在はその時がくるまで影に隠れていた。無駄に体格のいい次男と同じ背格好に近づく為に飯だけはキチンと食べさせてもらえた。それだけがこの多々田家に入って良かったことだ。

それ以外は誰にも認知されない、まるで幽霊のように生きてきた、とだけ行っておこ

う。

ただ来たるべく時に備え、密かに山へ行き身体を鍛え。誰ともほとんど話すことなく。

俺は１７歳を迎え、役目を務める時がきた。あれ、満２０歳で徴兵じゃないのか？うん、志願すると１７歳でいける、と。さっさと行けと、と。ほぉん、なるほどなぁ。理解はしたが納得したくない命令だ。もちろん拒否権はないわけだが。もっと早くに教えて欲しかった。

徴兵検査というものを知った俺は、多々田家に貰われてから始めて泣いた。簡単に言えば身体検査なのだが、まさかの公衆の面前で全裸にさせられるというものだった。それならまだいい。肛門まで調べるとはいかがなものか。イチモツを握られるのも耐え難い。というか触られたくない。これってセクハラパワハラですよね。断固として拒否する構えを見せた。いいんだ、どうせどんな欠陥が見つかろうと俺には帰る家なんてない。なら国の為だろうがなんだろうが衣食住を提供してくれるなら死ぬ気で死なない程度に働いてやる。だからお願いそれだけは。

そんな願いは虚しく。俺は肛門処女を指分喪った。もうお嫁にいけない。

余談だが抵抗したからって木刀で殴るのはやめようよ。見てこれ二の腕と顎の痣、暫くは消えそうもない。クソが、糞つき過ぎて指先から腐り落ちてしまえ。

無事…心は無事とはいえないがそれ以外の身体チェックもパスし、生兵として入営することとなった。持ち物もカアサン以外特に無いし、服だって着ているものとあと二着をなんとか着回している程度だ。褌は流石にもらったが。

唯一の小刀は認められるのだろうか…という心配をしている。それこそケツの穴に突っ込んで隠しても持っていくつもりだ。…が、色々考えた結果あまりにも現実的ではないと冷静になり自ら却下。自分とはいえ肛門にはいったものを握るというのは…うん、辛いな。出口から出たものは等しく廃棄されるべきだ。もしくは畑の肥やしにでもしてくれ。

軍服着たまま澄ました顔でやり過ごそう。部屋に入っちまえばこっちのもんだぜ。流石にそのままは見逃されないだろうとは思ったため褌を使い腰に巻き付けたが、思いのほか上手く隠れ無事に突破することができた。多々田透汰となってから緊張したことベスト5に入る瞬間だった。

俺が配属されたのは東京の、ではなく日本の最果て北海道の地である。なんということだ、流石にこれは前世からの記憶で覚えている。いわゆる屯田兵というやつではないか。小中高とわざわざ教科書に蛍光ピンクでラインを何度か引いた思い出がある、あ

の。自分の運は既に尽きていたことを思い知った。一体この先、生きていけるのだろうか…。

多々田透汰の身体は、意外とハイスペックだったことを思い知った。前世の私としての身体ではこうはいかなかっただろう。男女の差というものを抜いてもだ。周りの初年兵と比べても多々田透汰は飛び抜けて優秀だった。下手すれば余りの過酷さに命を落としていく仲間がいる。しかし多々田透汰は怪我はあれどすこぶる健康であった。よく働き、よく訓練し、よく眠り、よく食べ、良き輪を作る。それが入営から一年経った周りから見た俺の姿だった。大変よくできました、花丸満点の出来である。わーいわーいぱちぱちぱち……

「なんか急にしんどくなってきた」

ある夜のことである。突如として襲ってきた心的疲労に俺は悩まされていた。生きる為生き残る為と自分に嘘をつきながら心の悲鳴を無視してきた反動だろうか、これは現代的な病名をつけるとしたら『鬱病』とかいうやつだろう。

・夜眠れませんか

・食欲が減りましたか
・死にたいと思うことがありますか
エトセトラエトセトラ。今なら全てに力一杯太字でチェックだ。俺、なんのために生きているんだろう。
そんな状態になっても訓練はあるわけで。慣れたはずの銃の重さが今はしんどい。でも走る。これは反射運動だ。
いつもよりも多めに上官からビンタをいただいた。しんどい。
俺の身長に合わず寝台から足が出ている。これまで気にしたことないのに酷く落ち込む。なんで丸まって寝なければならないんだ。しんどい。
やばい。このままでは死んでしまう。…死ねばこのしんどいせかいから　解放される？
いかんいかん。これは深刻だ。なにか生きがいを見つけなければ。
「最近のお前変だぞ」
「俺もそう思う」
「どうした。なにか虐めにでもあってるのか？」
「いや…そうではないんだけどな。なんか精神的疲労が上限まできてしまったというか…そんなやつなんだ」

「おいおい確りしろよ。優秀なお前がイカレたら同じ班の俺らまで困るだろうが」
「…ああ、ごめん」
「頼むぜ多々田上等兵殿」
ジョートーヘードノ。そうだ、頑張ったら周りよりも一つ飛び抜けて偉くなってしまったんだなぁ、そのせいで自分の能力以上に頑張らなくてはならなくて、それがこの憂鬱のスイッチを押してしまったのかもなあ。あいつめ、まだ一等卒のクセして同等の扱いしやがって。そのまま変わらないままでいてくれよ。とはいえ、はあ、心がしんどい。
これはしばらく休んだ方がいいのではという結論に行きついたのはそれから暫く経ってからだった。いっそどっか身体の一部でも吹っ飛ばせば癒えるまでは休める。でも痛いのは嫌だなぁ、なんて事を考えながら射的訓練にて決められた的に穴を空ける作業を漠然とこなしていた。多々田透汰のハイスペック肉体は心と身体が多少乖離していても習慣で物事をこなしてしまうのが凄いところだ。
しかし上官からは『なんだその腑抜けた面は!』と有難い平手打ち（とても痛い）を頂いてしまった。疲れも合間って鼻の粘膜が薄くなっていたのか、両鼻腔から赤い液体がビロビロと流れ落ちた。まさか上官もいつものビンタで勢い良く鼻血ブーするとは思っていなかったのか、少し引いた顔で医務室に行くように申付ける。やったね、休む

口実ができたよ。
　立て付けの悪い横開きの扉を開き、常駐している軍医に治療してもらう。ちなみに軍服をなるべく汚さないように床を鼻血はぶち撒けさせて貰った。誰か片付けておいてくれ。
「鼻血の勢いもそうだが、酷く疲れた顔をしているなぁ上等兵殿」
「はあ、そうなんです。最近憂鬱が酷くて」
「憂鬱ねぇ…それは難しい問題であるな」
「頑張らねば、どうにかせねばとは毎分毎秒約考えているのですが、解決方法が見つからず」
「ふぅむ」
　先生は横になる俺の寝台に腰かけて首をひねる。気安いな、どんどん気安くしてくれ。
　俺はここぞとばかりに心の内を語った。他人に語れば軽くなるものもあるだろうと思い、少し恥ずかしいが性欲すらも枯れている気がするということまで話してみた。試みは少しだけ成功したのか胸に久しい清涼感を感じたが、やはり全てが晴れるというわけではなさそうである。
「正直詳しいことまでは分からないけれど、全てにひと段落が付いた段階で憂鬱が酷く

なったと言うのならね。それは多分がむしゃらだった頃から憂鬱だったんだろうね。そして自分を見直す時間が増えたからそれに気付いてしまった。ともかく、がむしゃらになれるなにかを見つけてみるのはどうだい」
「ということは今の俺はがむしゃらでは無いと」
「いわゆる生きがいというものだね。君は今までは自分を生かす事に生きがいを感じていたのだろうよ」
「でも今は死にたくなりますよ」
「まあまあ騙されたと思って。死ぬ気で取り組まないと本気で死んでしまうかもしれないことを見つけてごらんなさい。きっと憂鬱を感じている暇もなくなるだろう」
「結局それは憂鬱のままでは」
「今よりはマシだ」
なるほど。ブラックというやつだな。
話しているうちに鼻血は止まっていた。

０５私のヨビゴエ

軍というものは、所属しているだけでお給金をいただけるのだが。まあ国のためにいつでも鉄砲玉となり戦えるための準備を日々しているのだから同然と言えば当然なのだろう。俺はその金を”多々田家の次男”として不自然では無い程度に多々田家に送り、残りは必要最低限以外のものに使ってこなかった。使う先が無かった、と言っても過言ではない。

なにせ娯楽らしい娯楽を嗜む余裕も無かったのだ。せいぜい出ていく金といえば…必要最低限の衣服とか、私物で使う生活必需品とかそのくらいだ。

そのくらいだった。

最近の多々田透汰は一等すこぶる調子が良い。鬱々となり燻っていたのが冗談だったのではと思えるくらい爛々と目を輝かせ、日々の軍生活を送っている。

そして最近はちょっぴり出費が多い。これが彼を一変させたのだが…。

「おい多々田、明日は非番だろう。一緒に遊郭でも行かんか」

「すまない瀬戸。明日は少し用事があってな…」

「最近妙に生き生きしているじゃないか。前は誘われた時にしか金を使う先が無かった

お前が。…ん？　もしや女でもできたか？」
「はは、まさか。それよりも更に素晴らしいことさ。いわゆる俺の”生きがい”というやつを見つけたのさ」
「ほう。女遊びよりもいいことなんてオレにも教えて欲しいもんだがな」
「まあまあ、お前は女の方が楽しいだろうよ。まあ新しい学びのようなものだ」
「学びィ？　わざわざそんなことで休日を潰すのか？　優秀な奴はどこか変なところが欠落してるって噂は本当だったらしい」
「なんとでも言え言え！　とにかく、明日はすまないが自分の用事を優先させてもらうからな」
「好きにしやがれ」
　自分から声をかけてきたくせにぞんざいな扱いを受け、少し傷ついた。フリをする。瀬戸はこういう奴なので今更だ。

　次の日。ここ北海道は旭川。俺の心を表すかのように澄み渡った青空が広がっている。涼しい空気が鼻を抜けて脳天から咲き乱れるような気分だ。俺はいつもの堅苦しい軍服を脱ぎ、逸る気持ちで街へと繰り出した。

金の許す限り目的の物を買い集めたらもう街に用はない。休憩も取らずにそのまま兵舎に舞い戻る。門兵を担当していた顔見知りは日も高い内に戻ってきた俺を不審な表情で見ていたが、爽やかな笑顔で通り過ぎると困惑したように見送ってくれた。

自室に戻り買ってきたブツを他の目の届かないところに隠す。これ自体は見つかってもなんら問題のないものだが、なにに使っているかをバレるのが困るのだ。勘のいい者ならここまで辿り着いてしまうかもしれない、ということを危惧している。これもまたスリリングにスパイスを加える要素であり、まるで忍者ごっこをしているようで楽しいは楽しいのだから、俺は死に急ぎ野郎と呼ばれる奴なのかもしれない。

「さて、描くか」

ここで多々田透汰の中身がまだ私であった頃の職業を思い出していただきたい。絵描き、イラストレーター。結果としてその職種を名乗っていたものの、元々は利き手と脳の欲望を筆にぶつける只の同人作家である。それもＢＬを好み嗜んでいた貴腐人である。ちなみに私の絵のタッチはリアルタッチと呼ばれることもある、絵から生き物臭さが匂い立つような、そんな画風で活動させていただいていた。

因みに基本的に地雷はない。なんでも美味しく食べられる雑食系のお腐り人であっ

た。

つまりは、だ。約１０年ぶりに多々田透汰ではなく”私”としての生きがいに再熱してしまったということだ。

いそいそと買い込んだのは紙、炭、そして紐。描いて綴じる。その作業に必要な最低限のものだ。

まあ、そういうことである。

長年のブランクを感じさせる自分の画力の低下に絶望した。仕方ない、もともと多々田透汰は文字を書く以外で筆なんてとってなかったし、そんな絵なんて描いてる状況じゃ無かったし、そもそも漫画を一発書きとか無理乙。そうは思えど心が納得いかない。忙しい？そんなの理由にならない。描くものと描かれるものがそこにある。それだけでいい。そしてそこに絵師の魂と萌えを込める。その集大成が薄い本だ。それだけなんだ。ならばやるしかなかろう。”多々田透汰”ではない、私の生きる意味をここに見出した。鬱なんてなってる場合じゃねえ。

幸い軍には男色が横行しネタには困らないし、被写体も心のフィルムに好きなだけ刻み込むことができる。ムカつく事を言われても叩かれても『うるせえお前は次のネタで右にしてやる』と思えばなんだか優しい気持ちになれた。

世界が輝いてみえる。早く辞めたいなーなど腑抜けたことを思っていた気持ちにも

喝を入れることができた。
正直下級兵は勿論だが美味しくじっくり上官殿たちもネタにしてしまっているので、もしこれが私こと多々田透汰の描いているものとバレたら…ふ、どうなることやら想像もしたくない。まさに命がけ。でも活動辞められないんだけど！
こうして私は鬱病を克服した。

最近、北海道支部第７師団内で春画が流行っているらしい。
男の多い狭い世界だ、多少のことは許そう。春画の一枚や二枚、まったく興味が無い方が逆にどうなのかと思う気持ちもある。点呼の時間に慌てて隠す初年兵を見ると、お前らもか…と過去を思って懐かしくなる気にすらなる。
ただ、コレはなんだ？
自分の知っている春画とはまるで違うものであり、これを取り上げた時の異様な空気といったら…思い出すとわずかにゾッと鳥肌が立つほどだ…。
大日本帝国陸軍第７師団歩兵第２７聯隊所属の月島　基軍曹は頭を悩ませていた。それは下級兵から押収したとある一冊の本のせいで、只でさえやる事の多い業務が増え

るという確かな予感を覚えているからだ。

敵を倒すためには、まず知る必要がある。上司の情報将校から何度も聞いた言葉だ。月島は諸悪の根源を睨み下ろし、そして手に取った。

それは表紙には大きく英字で『ＢＬ！』とだけ書かれおり（どういう意味かは理解不能だ）、中を開けば見知った男達の絵が不揃いな格子状に引かれた枠の中に様々な角度から描かれている。背後にはよく描いたな、と思わず感心してしまうほど綿密に風景まで描写され、まるでその瞬間を切り取ったかのような素晴らしさだ。芸術のわからない月島でもこの技術には唸る。そしてこれは…これは、互いに話しているのだろうか？円形や時には無数の線で表された枠の中に、読みやすく丁寧な文字で会話のように文字が書かれている。直感的にどの順番で読み進めていくのかが分かり、情報量が多いはずのこの1頁はわずか数秒で終わってしまう手軽さだ。しかし、何故だろう。その描かれた男たちの表情や、指先だけを描写した枠の中から文字数以上の情報が入ってくるようでならない。

次に真っ暗に塗りつぶされた表現が続き、自然と展開が夜を迎えたことを理解する。流れからして、濡場だ。春画と呼ばれる全てが詰まっていた。

写真のように表現された肉体は引くほど立体的なのに、アイツとアイツの濡場なんぞ金を貰っても見ていたくないのに、不思議だ。どうしてしまったんだ。切なさが胸を打

つ。肉体だけではない精神の繋がりと、立場故のもどかしい気持ちが絵を通して伝わってくる。

「……、」

月島は最後の頁を読み終え、そしてそっと本を閉じ右手で目を覆った。

それは時間にして１０分ほどの、決して長くはない間の出来事だったのだ。

「アイツら…、そうだったのか…っ！」

涙こそ流さなかったが、鼻の奥を突くナニカを感じてしまった月島であった。

感動の中それでも優秀な彼は頭の冷静な部分で分析し、敵は思ったよりも強大で厄介な相手だと、心の底から理解する。

その敵とは『漫画』というのだが、この時はまだ日本に入ってきたばかりで拡がっていない上に、当時の技法と全く違う別物と言っても過言ではない産物なので、未知なるものと感じるのは仕方のないことである。

多々田透汰は…いや、中にいる未来の世を生きた一人の同人作家は、間違いなくこの世でただ一人の神絵師と化していたのだ。

そして未来よりもちょっぴり性に寛大なここ明治の時は、後にＢＬと呼ばれる薔薇香る世界にどハマりしてしまう男子が多くいたのも、また一つの敗因である。

北海道のごく一部で出回ったその本は、残念と言うべきか印刷されることは決して無い。一つの物語につきただ一冊のオンリーワンのものだ。密密に貸し借りを繰り返す間にも感動し涙するもの、春画の正しい使い方をするもの、模写しようと試みるもの…人の分だけ使用例がある。そんなヘビーローテションの中、コーティングされていないただの和紙が永遠の刻を生きることができる筈もなく…。いつしかそれは悲しいかな、ゴミ同然のものとなることも多かった。

素晴らしいその作品は、自分の手元にいつ届くのか。

新作が出ただと？　何としてでも一度は目を通したい。

お前が持っているのか、お前か、それともお前か。

ソワソワギスギスイライラハラハラ。

想定を遥かに超える効果を発揮した薄い本について、第7師団はこの問題を重く受け止めた。

『例ノ本ヲ所持スルモノハ直チニ報告セヨ。

許可ナク之ヲ確認シタ場合　班連帯責任ニヨリ重イ罰則ヲ課スル。

又　作者ハ直チニ　名乗リ挙ゲルベシ』

そう書かれた看板が貼り出されるのは、直ぐのことであった。

効果があったのかというと、より兵士たちの団結力を上げるという意味では多大なる効果を発揮したと記しておこう。